



ビスカパトナム港と環境に優しい鉄鉱石荷役

Visakhapatnam and its green iron ore solution

ベンガル湾に位置するビスカパトナム港はインドの12の主要港の一つであり、鉄鉱石の輸入拠点、コンテナや液化石油ガスの取扱拠点となっている。この港の管理者は南アジアの貿易拠点となることを目指して、同港の取扱貨物量を2020年までに1.7億トンに向上させる19億インドルピー(4800万米ドル)のプロジェクトを実施している。

ガンガバラムの新港の第一段階の拡張事業は4月までには運営が開始されることとなる。ケープサイズ以上の船舶を受け入れる容量を有したこの深水港は完全に機械化される予定である。鉄鉱石岸壁の建設は完了し、一方で石炭岸壁1バースとドライバルク岸壁3バースの建設が実施されている。航路は水深15mまで浚渫され今月(3月)末には20mまで増深される予定である。もともとの港湾は26岸壁を有し、そのうち19はインナーハーバーに位置するが、2006年から2007年にかけて5640万トンを取り扱っており、この取扱貨物量は2008年から2009年にかけて7560万トンまで増加する見込みである。

ビスカパトナム港トラスト(VPT)は環境管理の専門家チームを有し、港湾地区にお

短期で回復可能なものと解った。

現在の拡張計画は一時的に沿岸の海水の濁度を変化させるかもしれないが、その影響は回復可能なものである。貯蔵庫から流れ出した雨水の土壌への局地的な浸出が発生するかもしれない。しかし、土は農業に使われるわけではなく、飲料水は土からくみ上げられるわけではないことから、適切な手法によって緩和をはかることができる。

表層水による影響は低いと予想され、現在の土地利用形態を変化させるほどとは考えられない。心強いことに、外洋港湾プロジェクトの予想される影響度は感知できるほどのものではない。

この調査の一つの着目点は、地元の漁業関係者に負の社会経済的な影響を与えるか否かを評価することであった。しかし、漁村、スラム街、それ以外の都市域200世帯の調査結果では、逆に、港湾開発による増収により利益が発生するというものだった。

鉄鉱石取り扱い施設の開発は確実に地域全体の経済に貢献する。影響評価で確認された10の活動は労働需要の増加による経済情勢の改善により社会の中下層を直接援助することとなる。

この環境管理計画の一部として同港は422,000本の苗木を植え、このうち約350,000本が生存している。港湾をとりまく緑地帯の合計は約243ヘクタールとなった。

同港は、飛散物を抑制し大気環境を向上させるため、回収水を利用し、貨物ヤードと舗装に連続的なスプリンクラーシステムを設置している。自動化された飛散物抑制システムは3つの石炭ヤードに172のスプリンクラーとともに導入された。さらに3つの貨物地区にシステムを今年拡張する計画があり、鉄鉱石取り扱いに伴う飛散物による汚染を防止するため、運搬ルートの分岐施設にスプリンクラーを設置する。

新たな外洋港湾での活動による悪影響に対処するためVPTは4つの重要な要素、すなわち大気汚染、水質汚濁、騒音、港湾周辺の緑地帯のメンテナンスを制御することに注力する予定である。これらは港湾の環境が公害のないままであることを確実にし、その結果、地元住民により良い生活を提供するものである。

(抄訳者:航空局飛行場部関西国際空港・中部国際空港管理官付鈴木崇弘)

(校閲 港湾局国際・環境課 国際企画室)